



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	幼児の社会的知識の獲得過程における諸問題
Author(s)	小島, 康次; 関, 道子
Citation	北海道大學教育學部紀要, 42, 125-146
Issue Date	1983-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29266
Type	departmental bulletin paper
File Information	42_P125-146.pdf



幼児の社会的知識の獲得過程における諸問題

小 島 康 次・関 道 子

Some problems in children's acquisition of social knowledge

Yasuji Kojima, Michiko Seki

序

I 問題と目的	125
II 観 察 方 法	126
III 観察データの分析と結果 —ケース・スタディー—	128
1, ケースの選定	128
2, エピソードのマイクロ分析	133
3, 中期縦断的追跡	139
IV 今後の課題 —社会的スキーマ論の必要性—	145
1, 対人的相互交渉の「問題解決」的側面	145
2, 社会的モデルとしての「年長男児」集団	145

序

本論文は1つのまとまりをもった研究というよりは1つの観察の試みから筆者らが抱えるに到った様々な問題の導出過程を含む記録である。従って特定の理論的立場を貫くことや、手続きの厳密さを追求するという点については十分な注意を払ったとは言えない。むしろ、ここでは「生態学的観察」（三宅，1973；氏家・三宅，1982）において観察者に“見えるもの”をどのように考え、そこからどのような新たな問題を自らに問い、今後の実験、観察につなげていくか、ということに重点を置いた。

I 問題と目的

幼児の社会性の発達については、これまで多くの研究がなされてきた（e.g. 藤永・高野，1975）が、領域毎に特定の変数のみに注目した細分化された実験研究（e.g. Furman, et, al 1979）が主流を占めてきた。本論文は基本的に幼児は生活の場の中で対人的相互交渉を行ない、その過程で社会的知識の多くを獲得したり、社会的技能を習得するという立場（e.g. Corsaro, 1981）から、社会性の発達の過程を統合的に扱う研究法について試みたこと、並びにそこから得られたいくつかの問題点を紹介することを目的とする。

ところで異なった対象領域を統合的に扱う方法としては同一被験児の縦断的追跡が有効であると思われる。その際、個々の活動（e.g. けんか、遊び）は次の相互交渉の対象、交渉の仕方に影響を及ぼすと考える。しかし、ここで重要なことは個々の相互交渉が直接的に次の交渉相手や交渉の仕方に影響するのではなく、個々の子どもの「動機—目的」構造にもとづく規則に媒介されていると考えることである。個人内の変化を時間軸に沿って追跡していくと、ある予測可能性が生じてくる。それは多くの子どもの活動を平均した結果得られるようなものではなく、むしろその子ども

独自の「動機 - 目的」構造（レオンチェフ，1980）の中で理解されるべきことである。少なくとも限定された世界内における目標（GOAL）構造の中でとらえなければならないと考える。

II 観察方法

本観察は自然場面における VTR 録画による記録を観察方法として用いた。これは VTR カメラにより、付属乳幼児発達臨床センター内幼児園の幼児たちの自由活動場面において、「目についた活動」を収録するというものである。この VTR 録画作業自体は厳密な条件を設定せず、特定の子どもに偏らないように注意しながら目についた活動を文脈的に解釈できる程度を目途に行なった。従って、いくつかのエピソードが同時進行している場合は、それらの間をスキャン（走査）したり、1つの発展性のあるエピソードがある場合には、多くの時間をその活動の収録に集中的に費やすというように、録画方法は、時間、対象、内容に関して一貫性のあるものとは言い難い。しかし、全くランダムにカメラを回したのではなく、エピソードになり得る可能性の高いもの、即ち外から観察して「行動の目標」が容易に推測し得る場面を探索的に収録するように試みた。従って多くの「ハズレ」のシーンがあり、文脈の中でその行為のもつ意味が判然としない場合も少なくない。こうした様々な不備はあるが次のような利点もある。(1)基本的には1つの活動についてエピソード単位で見ることができる。即ち誰がどのようなキッカケでその活動を始め、どの子どもがそこに関わってどのように活動が展開していったのかというストーリーの流れとして記述できる。その中で、中心になっている子どもや周辺の子どもの「目標 - 行為」を推測することが比較的容易である（これに対し、エピソードの途中で機械的に打ち切ったシーンは「この前に何があったか、あるいはこの後どうなっていったか分らないと、この場面の意味がはっきりしない」と数人の観察者により報告された）。(2)「目標 - 行為」を軸とした活動レベル（少なくとも活動が始まる直接のキッカケと結末が重要な手掛りとなる）ではおさえることが難かしくても個々の行為のレベルで記述することが可能であり、大部分のシーンはこのレベルの分析に耐えるものである。その子どもが活動の中心ではなく、周辺とも言い難い場面（シーン）がこれに当る。この中には目標のはっきりしない「ハズレ」の行為の他に、別な子どもの活動のシーンに偶然映っている場合も含まれ、それは本来そのエピソードとは別な活動の一部として意味をもつもので、そのシーンだけみると意味が分らないものなのかも知れない。これら「フラフラした」行動、「無目標的な」行動と「目標をもった活動」の一部だが、面々からだけではその意味が不明なものを区別することは今後の課題である。本報告ではこの点を考慮に入れた分析はなされていない。(3)ランダムではないにしろ、特定の視点から特定の活動だけを捨てて録画しないことには次のような発見的長所がある。時間軸上の後の方で起った重要と思われる問題場面の解釈をする際に、時間軸の前の方へさかのぼって VTR を検索し、それに関連のある行為を探し出すことにより前のシーンの新たな意味づけ（後の活動の構成の一部として）が可能である。(4)特に本研究でとった方法に独自のものではないが、VTR による記録一般の（チェックリスト、全場面記録法等に対する）長所として、社会的文脈（周囲の子どもとの間でどのような活動を行なっているか）を必要に応じた精度で分析することができることが挙げられる。

対象児：北大教育学部附属乳幼児発達臨床センター内幼児園に通園する昭和56年度年長児16名（男児8名、女児8名）、年少児15名（男児7名、女児8名）。平均年齢と標準偏差（カッコ内）は年長男児5才9ヶ月（0.44）、年長女児5才8ヶ月（0.29）、年少男児4才7ヶ月（0.34）、年少女児4才6ヶ月（0.32）。

観察場所：センター保育室（読書室、廊下、不使用時の実験室などを含む）並びに同センター

園庭とその延長上にある道路、広場など（図-1 参照）。

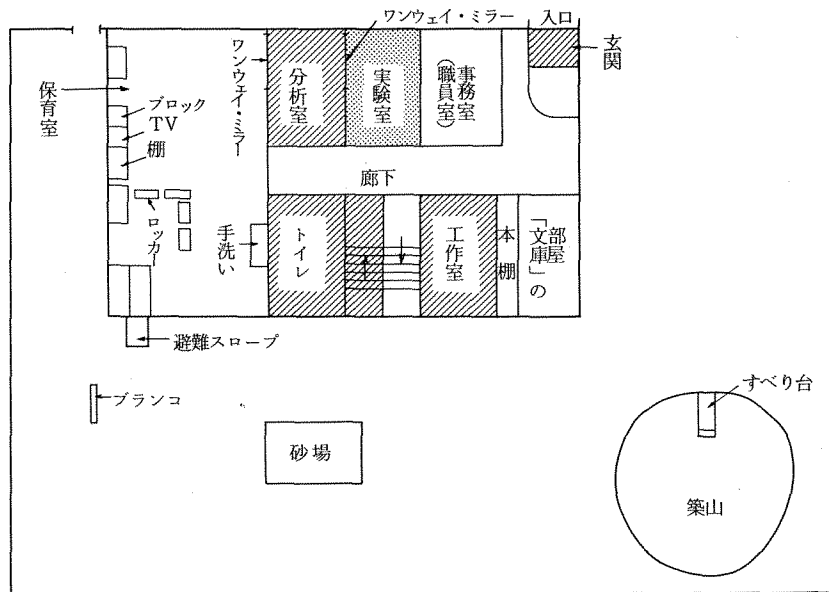


図-1 北大幼児園・「自由遊び」時の主な活動範囲

観察期間：昭和56年4月28日～12月3日（7月の末から8月は夏休みで除くので、約6ヶ月間）、実質観察日55日間。観察記録は午前中自由保育時間（9時30分から11時00までの間）中1日平均16.8分（5.2分～54.9分）（表-1 参照）。

記録方法：ホーム用ビデオ（ナショナル「マックロード」；日立「マスタックス」）により、自由遊びの中で目についた活動を収録。

表-1 昭和56年度北大幼児園観察記録日とVTR収録時間

観察日	撮影時間(分)	観察日	撮影時間(分)	観察日	撮影時間(分)	観察日	撮影時間(分)
4月28日	24.9分	5月26日	33.1分	6月25日	17.2分	9月29日	11.0分
30日	25.6分	27日	16.1分	29日	15.3分	30日	12.6分
5月1日	5.2分	28日	8.0分	30日	14.3分	10月6日	10.8分
6日	21.6分	6月1日	13.8分	7月2日	13.8分	7日	6.0分
7日	7.9分	2日	13.6分	16日	6.0分	13日	12.9分
8日	7.5分	4日	25.6分	(夏休み)		16日	26.5分
11日	15.2分	8日	22.9分	8月31日	12.8分	23日	17.6分
12日	8.0分	9日	29.4分	9月2日	12.9分	28日	13.0分
13日	28.7分	10日	15.8分	4日	15.3分	11月4日	8.5分
14日	28.6分	11日	21.6分	7日	9.3分	6日	9.1分
19日	54.9分	17日	19.8分	10日	24.1分	12日	8.4分
20日	17.0分	18日	17.3分	11日	14.3分	17日	26.5分
21日	38.7分	19日	12.6分	16日	6.7分	12月3日	11.3分
25日	14.7分	24日	9.3分	21日	14.8分	(冬休み)	

Ⅲ 観察データの分析と結果 — ケース・スタディ —

本節は対人的相互交渉がうまくいかなかったとみられるケースについて、いくつかの分析を試みる。「うまくいかない」ケースは、対人的な葛藤（や「いさかい」）場面や遊び相手の変化によりそのケースの外的変化を客観的にとらえやすいということ、またそれら葛藤場面の詳細な分析を通じて「うまくいかない」原因を探ることにより、対人的相互交渉のメカニズムに必要なルールの推定がしやすいなどの長所がある。

1 ケースの選定

録画したVTRテープは観察者1名（小島）と保育者2名（関道子、菅原尚美）により、その日の午後に再生し討論を行ない、対人的相互交渉、活動内容、会話等に関して解釈を出し合い、くい違いがある場合には、各人の解釈の根拠、画面にない情報の補足を行なった。特に仲間関係、仲間集団について、誰と誰がどのような遊びをしているかを検討する中で、一見年長男児集団に所属していながら、その集団独自の活動（ルールを必要とする遊び）には参加できていない1人の子ども（FT児）に注目した。そこで問題になったのは、①何故その子どもは年長児集団（その子の年令集団）に実質的に参加できないのか、②対人的交渉が上手くいかない場合、どのような行動上、あるいは認識上の変化（修正）が起るのか、という点である。

このケースの選定に際しては補助データとして春（5月）と秋（9月）2回のソシオメトリと、5月段階にみられた年長男児集団の集団遊び場面（「闘いごっこ」）における子ども同志の相互交渉回数を用いたので、表に示す。（表2、3、4）

ところで①、②の問題を考えるには我々が暗黙のうちに認めていたいくつかの前提についても吟味する必要がある。第1に「年長児（男児）集団」なるものがあるのかどうか。仮にそうした集団があるとして、対象児がその集団に入っていないということをどのように表現しうるか。第2に対人的相互交渉が「うまくいかない」とはどういうことか、そこでどのような問題が考えられるか、の2点について検討しておこう。

(1) 年長男児集団の存在

第1の前提はそれ自体興味ある研究問題となりうるだろう。何故なら、直観的にはあるが、「年長男児集団」が存在するという風に保育者や観察者（研究者、院生）の目に映る年度と、そうでない年度とははっきりと分かれるからである。何故ある年度には強力な「年長男児集団」ができて、別の年度にはできないのか？これは1年間だけの観察ではなく、数年にわたる比較研究を必要とするテーマであり、本論文では勿論扱いえない。しかし、若干の推論を立てることは本研究の前提の理解にも有用であろう。

「年長児（男児）集団」ができていとみられる年度には強力なリーダー（あるいはボス）が存在するようである。一般的には集団の凝集性は「集団のもつ魅力」（Cartwright, D & Zander, A. 1960；田中, 1974）を意味し、集団の大きさ、目標など集団のもつ性質そのものと、集団に所属することにより生ずる個人の基本的欲求の満足度により規定されるという（田中, 1974）。自由遊び場面を中心とする幼児集団の場合、集団の目標は「より組織された遊び」であり、個々のメンバーの欲求として「遊ぶ」ということがあると思われる。この場合のリーダーの役割は基本的には、個々のメンバーの好む遊びについて知り、できるだけ多くのメンバーが満足する遊びを組織することだと考えられるが、この点についても実証レベルの研究はみられず、今後の研究を要するところである。児童期以後の集団についてなされた研究をそのまま幼児にあてはめることは問題があるが、ここでは年長男児集団はリーダーの存在により、一応その集団としての必要条件を満たす

表-2 ソシオメトリの得点(男子)
:春(5月初)

		選 択		被 選 択	
		年 長	年 少	年 長	年 少
年 長 男 子	UA	3		5	2
	AK	3		3	1
	KM	3		4	1
	TM	3			
	FT	3		1	
	IT	2	1		5
	KT	3		5	
	AY			1	1
年 少 男 子	mh		2		2
	ik		3	2	1
	kk	1	2		2
	sn	2			3
	it	3			2
	nt		1	2	4
	ut	3			

表-3 ソシオメトリ得点(男子)
:秋(9月末)

		選 択		被 選 択	
		年 長	年 少	年 長	年 少
年 長 男 子	UA	3		7	8
	AK	3			2
	KM	3		6	3
	BG			1	
	FT	2	1		2
	IT	1	2	1	1
	KT	3		2	1
	AY	3		1	1
年 少 男 子	mh	1	2		
	ik	3		2	
	kk	1	2		
	sn	3			
	it	3			2
	nt	2	1		1
	ut	3			

と考える。それでは、リーダーの存在を含めて、年長男児集団の存在をどのようにしてデータとして表示しうのだろうか。第1にソシオメトリによる間接的方法が考えられる。即ち、特定の子どもが被選択数が際立って多いということになれば、それはリーダーの存在を示し、「年長男児集団」の存在を示唆するだろう。また「年長男児集団」が存在すれば、ソシオメトリにおいては年長男児同志の相互選択が多くなるであろう。

ソシオメトリに関して5月と9月の2回行なったものを参考にすると、被選択得点の高い子どもが1名(UA児)いて、5月段階年長男児の平均3.63点($\sigma = 2.23$)に対し7点、9月段階には平均4.63点($\sigma = 5.31$)に対し17点を得ている。2位の子ども(年長男児)と比較すると、5月段階では5点が3人、9月段階では9点が1人その子どもに次ぐ高得点をとっているが、いずれにしてもUA児がほぼ単独でトップであることは明らかである。また、年長男児同志の選択得点は5月段階 $= 2.57$ ($\sigma = 1.05$)であり、全員が年長男児を選ぶと $= 3.00$ となることから、ほぼ全員年長男児を選択しているといえる。年長男児と年少男児を比較すると年少男児同志の平均選択得点の方は $= 0.89$ ($\sigma = 1.13$)で両者の差はt検定により2%水準で有意であった。さらに9月段階は年長男児同志の得点 $= 2.57$ ($\sigma = 0.73$)、年少男児同志の得点 $= 0.29$ ($\sigma = 0.70$)でt検定により0.1%水準で有意差がみられた(表-2, 3)。これらのことから「年長男児集団」が存在すると考えることは妥当であると思われる。

(2) 対人交渉が「うまくいかない」ということ

次に第2の前提、即ち対人交渉が「うまくいかない」ということについてみると、まず何を基準にして「うまくいかない」とするか、「うまくいく」場合とはどういう場合かなどの問いが出てくる。

これも決して容易に答えの出せる問題ではないが、いくつか考えられる論点を挙げてみよう。対人交渉が「うまくいかない」ことを示す指標としてもっとも端的に考えられるのは、「けんか」ないし「葛藤」ということであろう。しよっちゅう「けんか」ばかりする子は積極的な意味で対人交渉がうまくいかない子どもである。また、もう 1 つの指標として「遊ばない（遊べない）」子どもが挙げられ、これは消極的な意味で対人交渉がうまくいかない子どもということになる。

これらは表面的には共に対人交渉がうまくいかない端的な例として認められるが、どちらも単純に一義的な解釈を許さぬ側面をもつ。「けんか」や「葛藤」はそれがより強いフレンドシップのキッカケになる。あるいはお互いがより深く知り合うステップとしても考えられるからである。いわゆる「雨降って地固まる」という交友関係上の重要な契機となりうる。また「遊ばない（遊べない）」ということも、その時点のみの観察からその子どもの特性としてみてしまうことは大きな危険がある。何故なら、保育 1 年目は全く他児との遊びがみられなかったり、殆んど自発的な活動を示さず他児の追従に終始する子どもが次の年（2 年目）にはドラスティックな変化を見せ、リーダー的存在になり保育者や観察者を驚ろかせる場合がしばしばみられるからである。

この場合の「遊ばない」状態は決して本来的に遊べないためではなく、そこでは一見何もせず、フラフラしている、あるいは他児の活動をボーッと眺めている状態の中で何らかの準備的活動をしていると考えられるのである。

それではこれらの区別はどのようにつけられるだろうか。予測上は現在のところ不可能であるといってもよいかも知れない。追跡の結果、ある子ども達はドラスティックな変化を起し他の子どもはその時点でも遊べない子であることが分るのであり、予め予測を立てることは困難である。このことは方法論上の問題を提起する。少なくとも解釈上は、ある場面の理解はその後の場面の理解がなければ非常に難しいということである。その時々意志決定、活動は勿論それ自体の権利において意味をもつが、そこで起っている活動のレベル、内容に関してはその後の諸活動の構造から推測するのが妥当と考えられる。しかし、そうすると仮に 1 つの価値判断の基準を定めたとしても、「うまくいかない」ということは、どこまでの「後」をみるかにより変わってしまうことになる。極端にいえば、幼児期から児童期と不適応（これもある観点からの判断を含んでいる）であった子どもが青年期にかけて「目ざめ」、人間的に成長する（これもある観点からの判断を含むわけだが）ということも十分ありうるのである。この点については構造の変化がどのように起るかということに関わる「理論」が必要である。ピアジェの発生的（構成的）構造主義はその 1 つの理論たりうると思うが、その最大の長所である「抽象化」は個々人の社会・情緒的発達を含む全人格的発達を表現するにはもう 1 つ何か重要な観点が抜け落ちたものであるように思われる。これに関しては稿を改めて私見を述べる予定である。

ここでは便宜的に幼稚園内の活動に限定し、「うまくいかない」とはどういうことかについても単純に 1 つの行動指標でとらえられるようなものではないことをまず指摘しておきたい。幼稚園内の活動に限定すれば、年長児後期に「不適応」であれば、一応「幼稚園ではうまくいかなかった」とみてよいと考えておく。また、「けんか」「遊び」などの対人交渉は仮説的に次のようなサイクルを考えてみよう。子どもは生態学的環境の中では自発的に、より「うまく遊べる」相手を探索し、その方へ接近するだろう。また「うまく遊べない」相手とは、およそ接近しない、あるいはケンカ葛藤をキッカケに「遊べない」ことに気づき回避する。しかし、適度のズレがあった場合には、ケンカ、葛藤はより親密な関係への契機になるだろう。従って「葛藤」と「遊び」の関係には次の 2 種類のパターンが考えられる。(1)「葛藤→接近（遊びの増加）」、(2)「葛藤→回避（その相手との遊

び減少)」のパタンで、(2)は更に「探索→他児への接近」というパタンにつながっていくと考えられる。

(3) 年長男児集団の構成とF T児の位置

本ケース・スタディの対象ケース（F T児）が年長男児集団と多くの遊び時間を共有しながらも実質的に遊んでいない（遊びのルールを共有していない）ということをもどのように表現したらよいだろうか。(2)でみたような明確に時間、空間を共有しない場合は「遊ばない」と言えるが、年長男児集団の周辺あるいはその中に居ても相互交渉が成立していないようにみえるのは何故だろうか。本項では年長男児集団のグループ構成と、1つの「遊び」のエピソードにおける相互交渉のパタンを例にとりみしてみる。

① ソシオメトリーから

ソシオメトリーからみると、年長男児集団は大きく2群に分かれる。5月と9月のソシオメトリーでも年長男児同志の相互選択をしている6名と、年少児あるいは年長女児を選択した2名で、前者は更に3名ずつのサブグループに分けられるし、後者の2名も機械いじりを好み、独り遊びの多いI T児と、上記6人の年長男児グループと行動をとともにすることは多いが相互交渉が成り立たず実質的に年長男児集団と遊んでいないF T児（本研究のケース）に分かれる（図-2参照）。

② 集団遊びの中での相互交渉の量とパタンから

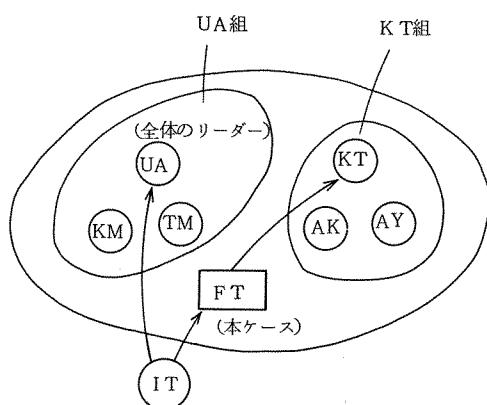
年長男児集団のメンバー間でしばしばみられた遊びに「闘いごっこ」がある。2つの組に分かれ、軽く叩く、倒す、蹴るなどの攻撃を加え合う単純な遊びである。しかし、単純ではあるがそこには一定のルールがあり、仲間同志は当然攻撃しない、また仲間が相手に攻撃されていれば助けに行くなどの行為がみられる。この「仲間」というのは、①で述べたように年長男児グループの下位グループである（厳密に言えばこの下位グループについても観察データ等から同定すべきかも知れないが、ここでは年長男児グループが分かれる時比較的多く観察される下位グループと考えておく）。この2つの下位グループのメンバー間の攻撃、被攻撃をマトリクスにしたのが表-4である。（図-2は下位グループの構成を示す）。

表-4 「闘いごっこ遊び」における攻撃・被攻撃の回数（年長男子：約4分）

		ATTACKER						
		TM	K T	K M	U A	A Y	A K	F T
RECEIVER	TM		13	0	2	2	7	1
	KT	6		6	3	1	2	0
	KM	0	6		0	4	3	1
	UA	1	1	0		2	2	0
	AY	1	0	4	1		1	0
	AK	2	0	2	2	1		0
	FT	1	1	1	0	1	0	
	total	11	21	13	8	11	15	2

この表にみられる攻撃と被攻撃の回数をみると、まずF T児の攻撃、被攻撃回数がともに他児に較べて非常に少ないことがわかる。パタンについてみると、理想的には仲間同志の攻撃、被攻撃は0であるべきだが、ここでの「攻撃行動」は必ずしも攻撃する意志をもって相手に力を加えることではなく、叩く、倒す、引っぱる、蹴るなど、外的に観察されるものは全て一律に含んだので

図-2 年長男児グループの構成



仲間同志にも攻撃、被攻撃があったかのようになっている。しかし、敵のメンバーとの間の攻撃、被攻撃が各人の攻撃・被攻撃の全数に占める割合でみると、80%以上説明がつくのである。FT児はどちらの組に属するだろうか。攻撃行動は2回ともUAグループに対してなのでKTグループに入れれば一応説明はつく。ところが被攻撃は両グループから2回ずつあり、説明が困難である。同一対象児との相互交渉（攻撃、被攻撃）が1回ずつしかないことと考え合わせると、ここでの交渉は「誤差」と考えてよいと思われる。

③ 問題解決の目標構造の相違という

視点から

②のように単純な行為の数量、ボタンとは別にこのエピソードを何回か反復観察すると、FT児と他児の動きはどこか違っているように見える。他児は遊びといっても真剣な表情で、力は抜いているものの、かなり乱暴なやりとりを行なっている。この場面を10ヶ月後（1982年2月）園児全員にVTRで見せ「何をしているところ」か聞いたところ、表-5のような答えが返ってきた（「スーパーマンごっこ」というのは2、3の子どもが幼稚園の制服の上着をマントのようにして着ていたことによると思われる）。ここで興味深いのは26人中6人の子どもが少なくとも初めの印象は「ケンカ」ないし「ケンカか遊びか分らない」と答えたことである。それだけこの場面は気魄のこもった活動場面だったといえよう。ところがFT児は他児のマントを軽く引っ張ったり、転がって組み合う者にニコニコしながら抱きついたりしている。

表-5 VTRで「闘いごっこ」を見た子どもの反応（解釈）

年長児	反 応 内 容	年少児	反 応 内 容
KM ♂	あそびでけんか	MH ♂	けっとう
FT	けんか→プロセス	NT	たたかい（プロレス）
UA	あそんでいる	IT	プロレス
AK	本当のけんか	SN	プロレス
AY	レスリング	UT	けっとうごっこ
KT	プロレス	IK	けんか→プロセス
IT	あそんでいる	KK	けんか（ウソンキ）
NM ♀	スーパーマンごっこ	SM ♀	プロレス
IN	スーパーマンごっこ	FM	けんか（ホンキ）
SS	フトンとびはねている	ON	けんかかあそび
TM	本気でけんか	TY	けんか（ウソンキ）
SA	たたかいごっこ	NY	あそんでいる（たたかいごっこ）
HS	プロレス		
OH	UAのまね		

即ちFT児にとっては、他児とジャレ合うこと自体が活動の目標であり、共に走り回っているだけで十分楽しそうに見えるのである。ところが他児は、明らかにグループ対グループの「たたかい」を演じているのであり、自分のグループが優勢になることを上位の目標に置きながら個々の活動を行なっているようにみえる。これはこの後みられた上位グループ間の本気のケンカに端的に現われてきていると思われる。しかし、このことは現段階では全くの直観的理解にすぎない。こうした対人的な活動のレベルの相違にも目標構造の階層的モデルによる表現が必要と考えるが、これについては今後の課題としたい。

2 エピソードのマイクロ分析

対象とするエピソードは1981年5月7日収録のエピソードで、FTが年長男児集団との間でどのような相互交渉を繰り返しているかを知るのに適当と思われるものである。何故なら、第1にFTを中心とした、年長男児とFTとの葛藤場面が含まれている、第2に葛藤場面から遊び場面への移行が含まれている。こうしたことから(1)FTと年長男児との間にどのようなキッカケで葛藤が起り、その内容はどのようなものか(2遊びに移行した後、FTはどのように遊びに参加するか、また(3)それらを通じてFTは年長男児集団の中で、どのような対人的問題解決の目標をもっていると考えられるかについて検討する。まずVTRエピソードを文章化する方法として、できるだけ客観的な行動の記述、その場で中心となっている子どもの発話、その意味づけ(解釈)の3レベルの記録を示す。この「活動の記述」「発話」にはさほど問題はないと思われるが、「解釈」の部分はVTR記録以前の年少児段階の活動の情報も含まれていて、その妥当性については客観的な吟味を経ていない。しかし、筆者らの問題導出過程には欠かせない部分なので敢えて記載した。

(1) 活動の記述、発話、解釈

エピソード(1981, 5, 7録画)

場所：(外) センター玄関前、向い側の建物の非常階段

要約：非常階段に登ったKTに対し、FTが「登ったらダメ」とたしなめるが、逆にKT, UAらにバカにされ泣く。しばらくFTに対するKT, UAの攻撃の後、TMによるUAへの攻撃からUAがオニになり、ドラキュラ(吸血鬼)ごっこが始まる。FTも参加しているが他児にタッチされると怒るなど、うまく遊べない。やがて他児は全員ドラキュラになり、FT1人仲間外れになる。

〔登場する子ども(年長男児)の簡単なプロフィール〕

FT(トモキ)：本ケース・スタディの対象児・年長児であり、年長男児グループと行動をとるにもすることは多いが、必らずしもうまく遊んでいない。

KT(タカオ)：年少時にはFTと行動をとることも多かったが、この時点では年長グループの2つのサブグループのうちの1つのリーダー格である。

UA(アキヒロ)：年長男児グループの中心的存在。ソシオメトリーでも年長男児ばかりでなく、年少児、女児からも選択されるなど、他児への影響力は抜群である。

TM(マサヤ)：腕力が強く活発。時にやや乱暴になることもあり、ソシオメトリーでは殆んど選択されない。

KM(ミキオ)：リーダーではないがソシオメトリーでUAに次いで高得点を示し、年少児、女児にも幅広い人気がある。

AY(ヨッケ)：双生児で瓜二つの顔立ち。観察者も顔だけで判断するとしばしば誤る。AK

AK(ケッケ)の方がやや活発な印象を受け、KTのフォロアーである。AYもKTのフォロ

アーではあるが、UA らともよく遊ぶ。

(活動の記述)

(発 話)

(解 釈)

1. FT: 玄関でKTが向い側の建物の非常階段に登るのを見る。

FT: (KTに向かって)「そこに登ったらダメなんだぞー悪い」

[1～7]

KTは年少児の頃、FTと行動を共にすること多くフォローとして行動していたようである。FTのKTに対する批判的発話は、その頃の延長上にある。しかしKTはその後年長男児集団のサプリーダー格になり、力関係は逆転している。FTはまだ十分そのことに気づいていないように見える。まだ自分が遊びの主導権を握っていると思いこんでいる様子は、4、6の「もうタカオと遊ばないから」という発話に表われている。

2. FT: 階段を2～3段登る
(年長女兒に話しかけられVTR中断(約20秒間))

KT: (FTを指ししバカにした調子で)「トモキのバックカー」

3. FT: 泣く(泣声はげしくなる)

FT: (泣きながら)「ウルサーイ」

4. FT: 手で涙をぬぐいながらKTの方見て泣く

FT: 「もうタカオと遊ばないから、もうタカオと遊ばないから」

5. KT: 非常階段の段からとび降りて、鉄柱の周りをグルグル回る。

KT: 「ほんと?」

KT: 「オーゴンカイジュー (黄金怪獣), オーゴンカイジュー」(意味不明)

6. FT: KTが回るのを見ている。

FT: 「もうタカオと遊ばないからね」

7. KT: FTの発話を無視

FT: 「このーっ、何よバカにしてェー」

8. FT: KTのところへ行き、たたこうとする(空ぶり)

UA: 「赤ちゃんぽいなベロベロバァー」

[8～19]

UA、イナイナイバァーの仕草をしながらFTをバカにする。この場面は園児学生らに見せたところ、UAはFTを「慰さめている」という答えが何人かから返ってきた。

9. FT: UAの方を見る(泣かない)

10. FT: KTの方見て叫ぶ

FT: 「キー、キー」

11. UA: FTを小突く。

KT: 「ケンカやればすぐ泣くんだよナー」

12. FT: UAをたたくマネする(KTの方見る)

UA: 「ベロベロバァー」

KT: 「ベロベロバァー」

13. UA: FTの後ろからこづく

FT: 「ヤルナー」
「ナンダコンニャロー」

14. UA: FTを2度つつく。

UAらにとっては「ケンカ」あるいは「いじめる」というよりも、遊び半分で「からかう」という位の気持なのだろう。つまり、FTは本気でケンカする対象ではないとみられていると

15. FT: UAのチョコカイに
反応しない 考えられる。
16. UA: もう一度FTをつつ FT: 「このヤロー」
く
17. FT: 怒り, UAを少し追 UA: 「赤ちゃんみたいだナァ」
う
KT: (UAに合づち) 「なァ」
ー」
18. UA: 後ろからFTをつつ
く
19. FT: 怒った表情する。
20. TM: 階段からとび降りて、 [20]
3人のところへ来る TM: 「上からとび降りたぞー」 TMはUA, KTらがFT
UA: 「それがどーした」 Tのみを攻撃する場面を変
21. UA: 後ろからFTをつつ FT: 「このヤロー」 えたようであり, 別な話
く 題を提供(「上からとび降
22. KT: 後ろからチョコカイ りたぞー」) しているよう
出そうと近寄る である。しかし, UAは
23. FT: KTの方をちょっと 「それがどーした」と受け
見て手を出す攻撃は つけない。
しない
24. TM: UAの口に何か発見 TM: 「アキヒロ, 口から血 [24 ~ 26]
出てるぞ」 TM, 上記20と同じ動機
25. UA: 口に手やり確かめる UA: 「ウン…?」 からと思われるが, UAの
26. TN: FTの方へ走ってい TM: 「ワァー, アキヒロ…」
く
FT: (TMの口調マネて)
「ワァー, アキヒロ」
27. FT: 階段の方へ走り, 4 FT: 「ワァー, アキヒロ,
段位登る バカタレ, 死んじまえー」
28. UA: 腕を前に差し出し眼
をうすく開けて歩き出
す(吸血鬼のマネ)
29. FT: 階段降り, 手すりを FT: 「ワァー, タスケテ」
回り, 再びおどり場に
登る
30. UA: 階段に近づく
31. FT, KT, TM: 手すり
の間から下へとびおり
る。

32. TM: FTにタッチする。 TM: 「トモキ、おばけー」
33. TM: KTにタッチ
34. FT: (TMをマネ) AY
にタッチ
35. AK: FTにタッチしよう FT: 「なによーっ」と怒りふ
とつかむ り切って逃げる [36]
36. TM: UAの方に向き直る TM: 「ウジイエ (UA) ばっ
かりオニだらダメだ。オレ
代ってやる」
(TMが一時オニになるが、UA再びオニになる)
37. TM, KM, AY, AK: TM: 「ウェーッ来た」
UAが近づくと逃げる。
38. UA: TM, KM, AYら KM: 「ドラキュラが来たー」
が逃げるのを手を突き
出し、ドラキュラの格
好でゆっくり追う。
39. KM: UAの方に近づいて KM: 「よし、おれドラキュラ
来る。 にしてもらおー」 [39 ~ 44]
40. AY: UAとKMの所へ来 AY: 「オレも」
る。
41. AK: UAがKMとAYを AK: 「何してるのー」
抱き寄せている所へ来
る。
42. KT, TM: KM, AY,
AKをUAが抱き寄せ
ている所に来て抱きつ
く。
43. FT: UAのところへ来る FT: 「オレもドラキュラにし
て」
44. KM, AY, AK, KT, TM:
UAに噛むマネをされ
た後離れていく。
45. FT: 1人だけ残り, UAの FT: 「オレも」 [45 ~ 49]
腕をつかむ
46. UA: FTのつかんだ手を
ふりほどき、拒否。
47. KT: 側でそれを見ていて、 KT: 「ダメって」
すかさずFTに向かって
言う
- ドラキュラ (大オニ) 役
はUAがやっているので
TMが交替を申し出て、一
時TMがやるが、やはり
UAの演技力(?)が必要らし
く、再びUAが大オニをや
る。
- 人気者 (ソシオメトリー
でUAに次ぐ高得点) のKM
が「オレもドラキュラにし
てもらおう」とUAに近づ
く。するとAYもすぐに寄
ってきて「オレも」と言う。
AKも寄ってきてUAが3
人を抱き寄せかむマネをす
ると、KT, TMも続いて
抱きついてくる。
すると、オニになるのを
嫌がっていたFTも「オレ
もドラキュラにして」とや
ってくる。
- 全員ドラキュラになった
後, FT 1人だけ残り, UA
にすがりつくがUAふりは
どき拒否。KTがそれを見
ていて更にからかうように
ダメを押す。AYもドラキ
ュラの格好でFTに近づく。

48. AY: ドラキュラの格好し AY: 「ウー、ウー」 つまりFTをドラキュラの
てFTに近づく 仲間と認めていない態度を
とる。FTはヒステリック
49. FT: UAらに向って泣き FT: 「まただー」 に「まただー」(また仲間
外れだ)と叫ぶ。
わめく
50. FT: UAに追いつかり、 FT: 「オーイ、オレもドラキ [50]
ようやく噛んでもらい ュラになったんだァー」 ようやくUAにかんでも
他児に向って叫ぶ。 らい、皆に向って仲間にな
ったことを知らせる。

(2) FT児と他児の葛藤

本エピソードは遊び道具や、遊びの役割の奪い合い(FTの他の葛藤エピソードでは多くみられる)ではなく、自己認知を含む対人認知のズレが原因となっていると考えられる点が特徴的である。その背後にはKTの急速な変化(社会化)があるだろう。年少段階でKTに対し比較的イニシアティブをとっていたFTは、そのつもりでKTに対し、その行動をたしなめるような発話をし逆に攻撃された。また年長児集団の中で、他児がとっているルールを十分理解しない(あるいはそれに従わない)ことから、しよつ仲間外れにされるにもかかわらず、年長児集団の中に入ろうとするために、小さなトラブルが絶えない。「ドラキュラごっこ」でも、オニの役割をとろうとしないので他児を困惑させる。

FT児と他児の葛藤は特殊なものではない。次のように一般化することが可能だろう。新しい集団へ適応する場合、多かれ少なかれすぐには自分の能力を発揮できず、他児の動き、パーソナリティを探索期間を置き、そこで社会的知識を得た上で活動性が高まる。この観察期間をとらない子どもの中に他児と関わりなく自分の興味あることをいわば自己中心的に行なう子どもがいて、他児の変化に気づかず葛藤場面を惹き起す。この場合、特に観察期間に不安の高い(ように見える)子どもは、この自己中心的タイプの子どものタテ(楯)にとりフォローとしてふるまい、時期がくるとその子を離れ他の(よりコンピテントな)子ども(集団)へアプローチしていく。KTとFTの関係は多分にそうした側面を含んでいると考えられる。この点については現在、次の観察計画のポイントとして準備中である。

(3) FT児の年長男児集団における遊び方

本エピソードに一応限定してみても、FT児は他児と同じルールに従っているとは言い難い。このドラキュラごっこはTMがUAの口に血のようなものが付いていることをハヤシ立てたことをキッカケに、UAが即興的にドラキュラ役になり、その現実と仮想の間の移行が余りに見事な為に他児はUAのオニに対し他の後からルール(交替)で決めたオニに対する以上の興奮を感じたように見える。部分的にはオニごっこのように時々他児がオニになり、「いった」(タッチ)をして、された方とオニ役を交替するというパターンがみられるが、そこでのやりとりは比較的事務的(?)であるのに対し、UAが来る時は「ウァー、ドラキュラだ」という叫びとともに必死で逃げ回る様子がありありと見える。

そうした中でFTは他児からのタッチに対し拒否的で、とに角オニにはなりたがらない。これは一般的にFTの役割の取得、交替が未熟であるとも考えられるが、ケンカ遊びという流れの中でみるならばKT、UAからの攻撃をようやく免かれ、それまである意味でオニ(異端者)として扱われていたのが解放され、多数派に回った状態を失うことへのおそれとも取れる。結局、最後の

方でKMが「オレもドラキュラにしてみらおー」という発言で皆UAの周りに集まりドラキュラになった時、FTも「オレもー」と寄ってくる。そして、UA、KTに拒否されると「また(仲間外れ)だー」と泣き顔になる。中間のオニごっこの間は、UAに対して「アキヒロ、オバケー」と逃げる以外はやや傍観的であり、他児の動きを見ているようであった。

(4) FT児の動機－目標構造

対人交渉を一種の問題解決とみるとすれば、このエピソードの中で彼らはどのような目標構造のもとに活動しているのだろうか。

UA、KTらは始めFTのKTに対する批判をとらえFTを攻撃する。しかし、これはUA、KTらにとってはケンカではなく、遊びといった方がよいだろう。この場面を10ヶ月後にVTRでみた園児の反応(解釈)は表-6の通りである。24名中9名は「笑わそうとしている」「なぐさめている」「ふざけている」などUAの行動をポジティブにとらえている。これは数名の学生に見せた場合にもみられることから、幼児の理解の特徴というよりは実際UAの表情、態度はリラックスしたものだったと考えられる。エピソードの7～18までの執拗とも思えるからかいは何のためなのだろう。11から17の活動の記述をみると、UAらは決して本気でFTを叩いたり、攻撃する意図はないことが分る。

表-6 VTRでUAとFTの葛藤場面を見た子どもの反応

(Q=UAは何故FTに「ペロペロパー」をしているのか?)

年長児	反 応 内 容	P or N	年少児	反 応 内 容	P or N
KM ♂	泣き虫だから…	N	MH ♂	いじめている	N
FT	たかお君が悪いことするから	?	NT	赤ちゃんともちがえた	?
UA	いじめている	N	IT	笑わそうとしている	P
AK	笑わせている	P	SN	いじめている	N
AY	泣かせている	N	UT	いじめている	N
KT	おしたから(泣いた)	N	IK	いじめている	N
IT	笑わせるため	P	KK	泣いてかわいそうだから	P
NM ♀	たかお君をたたいたしかえししている	N	SM ♀	いじめている	N
IN			FM	泣かないようにしている	P
SS			ON	ふざけている	P
TM			TY	なぐさめる	P
SA	いじわるしている	N	NY	おもしろがらせる	P
HS	なぐさめている	P	HA	いじめてる	N
OH	バカにしている	N			

24～28のTMとUAとのやりとりからUAがドラキュラごっこ(オニごっこ)を即興的に始めたことを考えると、それぞれのFTに対する攻撃にはFTを怒らせ、UA、KTらを追わせる動機が働いていたようである。明確な意図はなかったにしろ、怒る子(オニ)に対し、ちよっかいを出し逃げるのは楽しい(?)ことであるらしい。「オニごっこ」という遊び自体「適度に危険な追いかけてくるもの」から逃げることによる高揚感に基いているのであろう(この点は文献、データの検討したものではない)。UA、KTは何らかの集団遊びを始めようとしていたと考えられる。周囲の他

の子どもは積極的にFTを攻撃するわけでもなく、またUA, KTを制止するわけでもなく、傍観している。何かが始まれば動き出すが、それまではリーダー格の子ら(UA, KT)のやることを見ているようである。只、TMは新しいキッカケを作ろうとしてUA, KTに働きかけているように思われる。24～26はそれにより、UAがオニのオニごっこが始まる様子を示している。

FTはこのエピソードの初めにネガティブな場面に置かれ、UAがオニになったとみるや、自分は「再びオニにならないように」気をつけているように見える。ここではFTにとってのオニはかなり現実の自己と重なった状態ととらえられているようである。32, 35のFTの発話にみられるようにオニになることを拒否している。TM, KMらが自らドラキュラ役の交替を申し出ているのとは対照的である。

従ってFTのサブゴールはこの場合、孤立しないこと、多数派に同調すること(オニ=異端者にならないこと)であると考えられるのである。このエピソードの最後の方で全員UAのところに集まりドラキュラにしてもらうことになることになると、43, 45で「オレもー」とやってくる。また46, 47でUA, KTに一時拒否されると49で「また(仲間外れ)だー」とベソをかく。最後の50で「オレもドラキュラになったんだぞー」と喜ぶ様子が印象的である。他児にとっては新たな遊びの始まりであるが、FTにとっては1つのゴールにたどり着いたように見える(これはJ, M, Gottman & J, T, Parkhurst (1980)の結果と一致する)。

3 中期縦断的追跡

对人的交渉が上手くいかない場合、どのような行動上の変化が起るのだろうか。変化を追う方法としては縦断的追跡法(三宅, 1973)があるが、多くの場合数週間の短期追跡法かあるいは数年にわたる長期追跡法がとられる。前者は主に教育的介入などの実験的操作を含む場合であり、変数を限った行動のチェックが用いられるのに対し、後者はよりグローバルないくつかの変数(IQ, 家庭環境など)をとり、それらの間の相関関係をみようとする。本項で用いる「中期」追跡法はここでは次のように定義しておく。発達段階にまたがるような長期ではなく、実験的操作のみの効果をとる短期でもなく、「子どもの自発的な変化をみるのに必要な期間」と一応定めておこう。

方 法

この項ではVTRに収録したシーンの中でFT児が映っているものを全てをピックアップし、そこでの活動を次の3通りにコーディングした。

「遊び」：鬼ごっこ、スロープ(すべり台)のかけ登り、雲梯、レスリングごっこ、積み木(ブロック)遊び

「その他」：傍観、移動(特に次の行動と結びつかないもの)、ボンヤリしている、お片付けなどのルーチン活動

「葛藤」：ケンカ、つかみ合い、叩き合い、口論などの行動と、泣く、怒るなどの感情表出を伴う相互交渉。

また相互交渉の相手(対象)については次のようにコーディングした。項目は「大人」(教師, 学生など), 「年長男児」, 「年少男児」, 「年長女児」, 「年少女児」の5つである。全体の撮影時間の中でFT児が映っているショットの割合は図-3の通りである。これは各ショットの長さに関係なく、その日のFTのショット数を撮影時間(テープカウンター)で割ったものである。白スキの棒はその日の全撮影時間を示し、斜線棒は上記の割合を示す。従って斜線棒が長ければ、白スキ棒(全撮影時間)に占めるFTのショット数が多いということである。テープカウンターは、カウンター1に対し、約7.8秒である。FTの映っているショット数は4月28日～12月3日の間

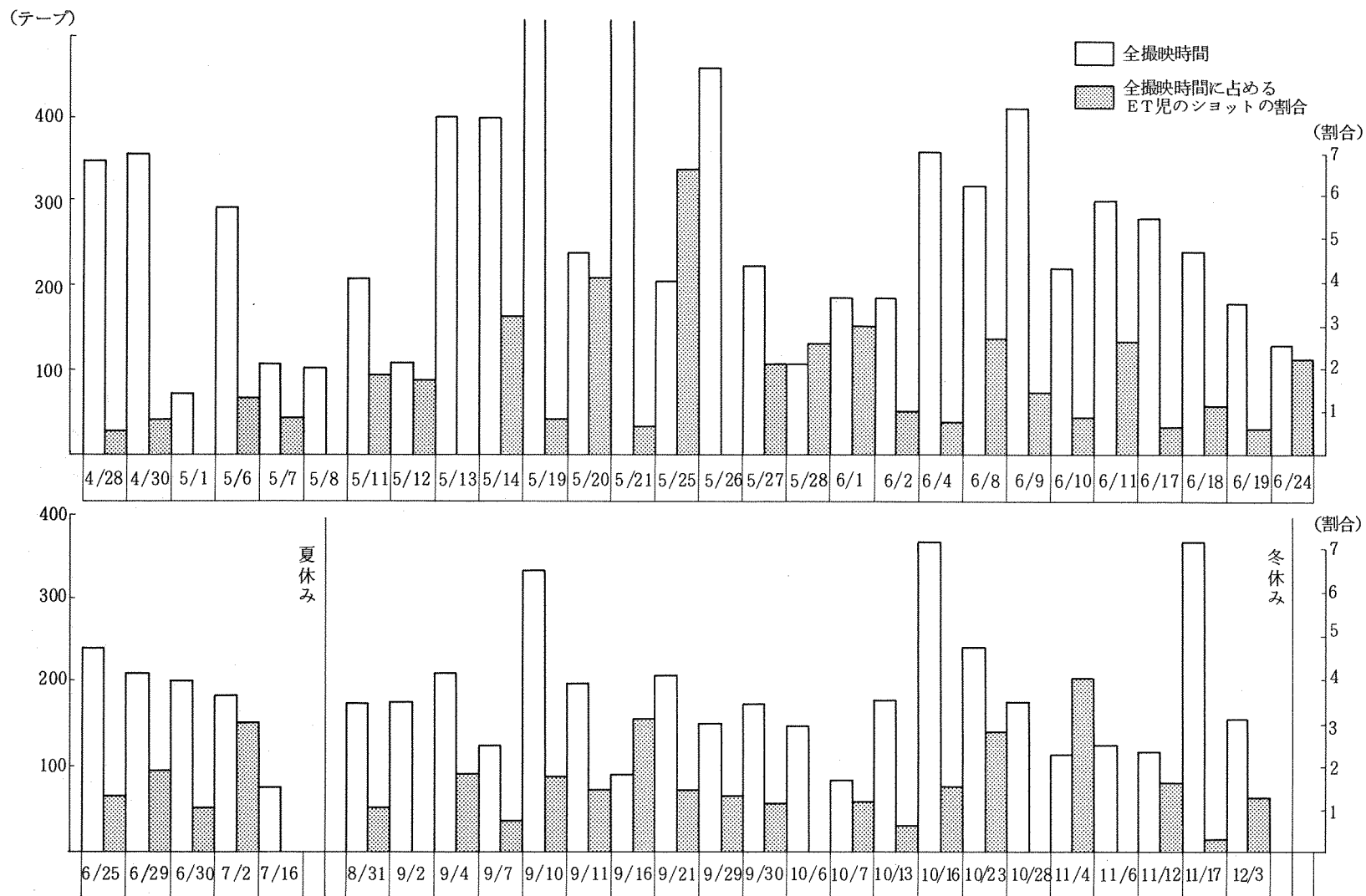


図-3 全撮影時間におけるFT児のショットの割合

に全部で 155 あった。

対人的相互交渉相手とその活動内容の変化については図-4, 5, 表-7に示した。また図-6, 7 は毎日に異なるショット数の偏りを最小限にする目的をもつ。

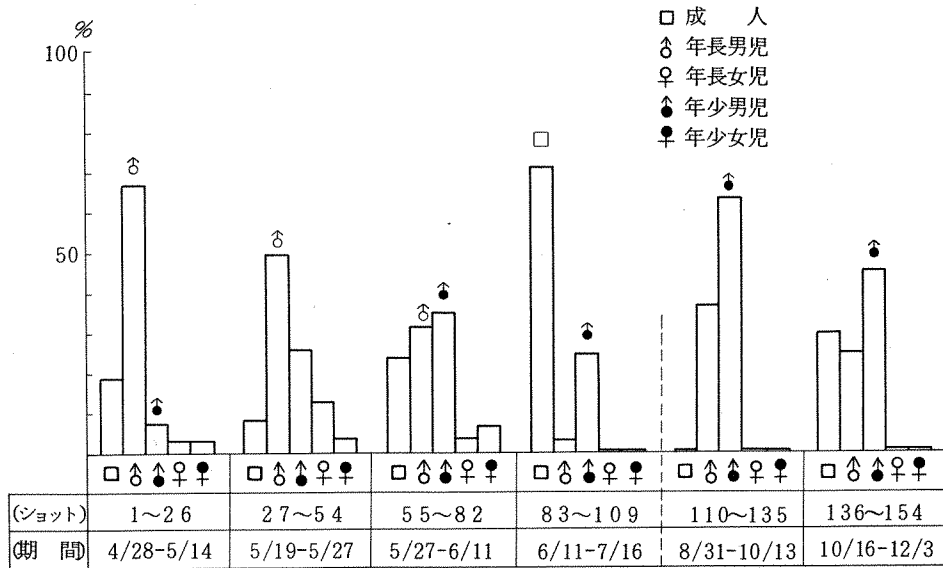


図-4 FT児の相互交渉相手の時期による変化

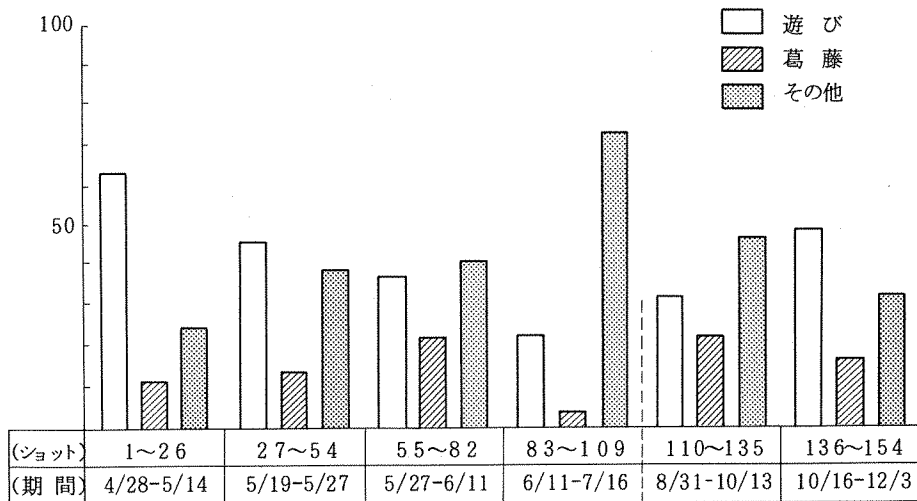


図-5 FT児の対人的活動内容の時期による変化

表-7 相互交渉の対象毎の活動内容の変化

ショット	1～22			23～44			45～66			67～88		
活動 対象	遊び	その他	葛藤	遊び	その他	葛藤	遊び	その他	葛藤	遊び	その他	葛藤
年長男	13	2		10	4	1	3			3	1	4
年少男	2					1	6	3	2	5	3	1
女子			1				1		1	1		1
大人	3	2						2			1	
なし(独り)		1			5			6			2	
ショット	89～110			111～132			133～154					
活動 対象	遊び	その他	葛藤	遊び	その他	葛藤	遊び	その他	葛藤			
年長男				4	1	3	2		4			
年少男	1	2	1	6	2	3	6	2	2			
女子												
大人	1	6						1				
なし(独り)	2	8			9		2	3				

結果と考察

撮影日によるショット数の偏りを補正した図-6(夏休み前)、図-7(夏休み後)についてみると、夏休み前は「遊び」相手は5月段階で「年長男児」が圧倒的に多かったのに、6、7月はほとんどみられなくなることがわかる。逆に「年少児」との遊びが6月中旬に多くみられるが、それも6月後半から7月にかけて急減することがわかる。「葛藤」との対応をみると、5月中旬に「年長男児」との「葛藤」があり(その1つは前節でエピソードとして紹介した)、また6月中旬には「年少男児」との間に「葛藤」がみられ、各々その後「遊び」が減ると考えられる。女子との「遊び」も5月末から6月初めにかけてみられたが「葛藤」を経て、6月後半以降全くみられなくなった。このようにFT児の場合にみられた葛藤は「葛藤→接近(遊び)」のパターンではなく、「葛藤→回避」のパターンであることがわかる。その主要なメカニズムについては今後個々のエピソードについて検討しなければならないが、本論文で記述したエピソードについてみると、①自己認知(自分が「年長男児」の一員として、十分その能力をもっているかどうか、という認識)が未熟、②自分と他児(例えばKT児)との関係の認識が不十分(これはKT児の変化(他者認知)に気づかないことが主な原因と考えられる)、③幼稚園におけるFT児の目標構造が他児と異なる(これにはいくつかの理由があろう)等が考えられる。

月日	遊 び					その他（中性的活動）					葛 藤			FT児の ショット 数	
	年長 男子	年少 男子	女子	おとな	独り	年長 男子	年少 男子	女子	おとな	独り	年長 男子	年少 男子	女子		
4/28	○													4/28	2
5/30	○													30	2
6	○	○								○				5/6	4
7	○			○							○			7	1
11	○													11	4
12				○										12	2
14	○					○			○	○				14	11
19						○					○			19	5
20	○		○											20	7
21						○				○				21	4
25		○				○	○	○				○	○	25	9
27	○		○							○				27	6
6/1	○	○					○							6/1	4
2										○				2	2
4										○				4	2
8		○	○				○			○	○	○	○	8	6
9	○	○									△			9	5
10		○									○			10	2
11		○				○			○	○				11	8
17							○			○				17	2
18					○					○		○		18	3
19		○												19	1
24									○	○				24	3
25							○		○					25	2
29				○			○		○					29	2
30					○					○				30	2
2									○					7/2	2
7/16										○				16	4

図-6-(1) FT児の相互交渉 - 夏休み前

月日	遊 び					その他（中性的活動）					葛 藤			F T児の ショット 数
	年長 男子	年少 男子	女子	おとな	独り	年長 男子	年少 男子	女子	おとな	独り	年長 男子	年少 男子	女子	
8/13										○				8/31 1
9/4						○				○		○		9/4 5
7		○												7 1
10	○	○								○				10 5
11	○									○				11 3
16	△	○					○				△			16 3
21							○					○		21 2
29		○								○				29 2
30	△	○									△			30 2
10/7											○			10/7 1
13		○										○		13 1
16		○												16 2
23	○	○								○	△			23 6
11/4									○		○	○		11/4 5
12							○			○				12 2
17		○												17 1
12/3							○			○				12/3 2

図-6-(2) F T児の相互交渉 - 夏休み後

また6月下旬、7月には「傍観」などの中性的対人行動の対象として「おとな」が増加しているのが目につく。ショットの数により区切ってみた場合の相互交渉相手の割合の変化は図-4にみられるように「年長男児」との交渉が漸減し、「年少男児」との交渉が漸増する傾向にあり、夏休み直前には「大人」との交渉（「中性的行動」）がグンと増加するというボタンをとっている。また、その活動内容についてみると（図-5）「遊び」が漸減し、「その他」の割合と逆転するボタンがみられ、「大人」への接近、他児の活動の「傍観」というボタンを示している。即ち「年長男児との葛藤」→「年少児との遊び」→「年少男児との葛藤」→「大人への接近、他児の観察(?)（葛藤の減少）」というのが夏休み前の活動の流れであると考えられる。夏休み後は葛藤もみられるが「年少男児」との「遊び」が多く、また「年長男児」との「遊び」もみられる。また「ひとり」でいることも多く、特徴としては「大人」「女子」との交渉が非常に少ないということである。

図-4でみても相互交渉相手の割合は「年少男児」が多く、「年長男児」がそれに次ぐ。また図-5で活動内容を見ると、「遊び」が増加傾向にあり、「その他」は減少する傾向にあることが分る。夏休み後の「葛藤」後には対人的相互交渉が減らないのは何故だろうか。図-6(1),(2)で「年長男児」欄にある「△」は図-2で年長男児グループに属さないもう1人の子どもI T児との交渉を示すもので、F Tの9月以降の「年長男児との葛藤」は、このI T児との間のものが多い（60%）。I T児はF Tとは違った意味で社会性に乏しく（Ⅲの1の(3)の①参照）、この場合の「葛藤」はI T児の要因が大きく働いていると考えられる（このことを示すエピソードがいくつかあるが分析中である）。従って、これらのことから「夏休み前、他児の観察」→「夏休み後、年少・年長児

との遊び」（「その他」の減少）というパタンがみられる。

これらについては活動の内容にわたるエピソードのつながりを検討すべきであるが本論文ではできなかった。

IV 今後の課題 — 社会的スキーマ論の必要性 —

1 対人的相互交渉の「問題解決」的側面

F T児の結果を約半年間の時間の中だけでみるならば「快 — 不快」にもとづく「接近 — 回避」、新たな相互交渉への探索という図式はよくあてはまるようである。また、その説明としては認知的動機づけの接近があてはまるようにも思われる。しかし次のような問題が残されていると思われる。F T児は自分が遊べる年少児との相互交渉を増すがそれは年長児に対するものと同種のものだろうか。即ち対等な友人関係を結ぶのか、あるいはその中でも「年長児」としてのアイデンティティーをもちながら年少児と交渉しているのだろうか。今のところ確かなデータはないが、いくつかのエピソードは活動の内容により異なることを示している。同じ交渉相手でも、どのような態度をとるかは活動の内容を含む文脈に依存すると考えられる。たとえば「ヘイ登り」のようなものはF T児の運動能力（体力）からすれば有利であり、年少児に対し「指導者」的な交渉になる。他方「ブロック」はその年少児の方が得意であり、主導権をとられる。しかし、表面的には年少児に従っていても、それをどのように認識しているかは不明であり、そこで必ずしもF T児は自己認知を年少レベルに合わせているとは言い難いであろう。この点は更に年少児とF T児との葛藤の内容を分析する必要があるだろう。

年少児との葛藤の分析は次のような視点で行なうべきであろう。(1)どのようなルールの相違により年少児の働きかけをF T児が拒否するのか、(2)どのようなルールの相違により、F T児の働きかけを年少児が拒否するのか。年少児との遊びが年長児との活動よりうまくいくとしても、その後にもみられた年長男児集団の周辺の“うろつき”（年長男児の活動に対する傍観を含む）行動は何を意味するのだろうか。またやはり後半にもみられた年長男児（特にリーダー、U A児）への接近のいくつかについても春の段階のアプローチとは異なるようである（これについてエピソードの詳細な分析が必要である）。

更に年長男児と年少児との間の会話に時折みられる年令に関するやりとり（「オマエ何才？オレ5才、年長だゾ」）についても、F T児が年少児に対してそうした態度をとっているかどうか検討する必要がある。F T児が一旦脱落した(?)年長男児集団が、その後も彼の準拠集団としての意味をもつとすれば、F Tは彼のあるべき姿としての自己イメージをもっていると考えるべきだろう。「年長男児」としての自己：年長男児集団に適應することはF T児の社会的相互交渉において解決すべき上位の問題（目標）として存在しているようにみえる。

2 社会的モデルとしての「年長男児」集団

前項でみた年令に関する自己概念とそれに伴う目標構造がないとしても、F T児を年長男児集団へと向かわせるもう1つの要因が考えられる。年少児の年長児に対する一般的に高い志向性がそれである。ソシオメトリーで年少児の年長児に対する選択は5月、9月とも年少児同志の選択よりも高いことがみてとれる（t検定で有意差あり）。特にリーダー格のU A児、KM児らは年少男児にとって魅力的な存在であるらしく、何人かの年少男児は機会があれば年長男児集団の一員に加わりうと試みるが多くの場合拒否されたり、一旦は参加できても葛藤場面を経て脱落する。それでもなお挑戦するというパタンがみられ、「快 — 不快」→「接近 — 回避」の図式は前項の可能性の

場合同様不十分であるし、「認知的動機づけ」も結果によって反証されない説明にすぎない（「接近」がみられれば常に最適のズレがあると言えるし、「回避」はズレが大きすぎた、あるいはスキーマが未熟にすぎたということになる）と思われる。しかし、「年令」、「準拠集団」、「自己」に関する強い「理論」が幼児に存在するとは考え難い。社会的知識に関する（知識間の弱い相互作用にもとづく）スキーマ理論が求められるゆえんである。

参 考 文 献

- 藤永 保・高野清純（編） 社会性の発達 幼児心理学講座 第4巻
日本文化科学社 1975
- 小島康次・関道子・淡路尚弘 社会的知識の獲得過程に関する基礎的研究
北海道心理学会第28回大会発表論文抄録 北海道心理学研究4号 1981
- 小島康次 社会的知識の獲得過程
北海道心理学会第29回大会発表論文抄録 北海道心理学研究5号 1982（印刷中）
- 三宅和夫 第10章 発達心理学の歴史と方法 藤永保編 「児童心理学」 有斐閣 1973
- 田中祐次 第7章 学級集団のダイナミック 斉藤耕二・菊池章夫編著 ハンドブック 社会化の心理学
川島書店 1974
- 氏家達夫・三宅和夫 第1章 生態学的研究法 波多野誼余夫編 教育心理学講座Vol.1.「発達」
朝倉書店 1982
- Cartwright, D., & Zander, A. Group cohesiveness : introduction. In Cartwright, D., & Zander, A. (Eds.) *Group dynamics* Tavistock 1960
- Corsaro, W.A. Friendship in the nursery school : social organization in a peer environment. In S.K.Asher and J.M. Gottman(Eds.) *The development of childrens friendships*, Cambridge University Press. 1981
- Furman, W., Rahe, D.F. and Hartup, W.W. Rehabilitation of socially withdrawral preschool children through mixed-age and same-age socialization.
Child Development, 1979, Vol.50, 915-922
- Gottman, J.M. and Parkhurst, J.T. A developmental theory of friendship and acquaintance ship processes. In W.A. Collins (Ed) *Minnesota symposia on child psychology* (Vol.13) Hillsdale, N.J. : Lawrence Erlbaum, 1980
- Леонтьев, А. Н (西村 学・黒田直美訳) 活動と意識と人格 明治図書 1980

付 記

本論文は小島他（1981），小島（1982）をまとめたものであり，小島，関の共同研究であるが文責は小島にある。

ソシオメトリの資料は淡路尚弘氏の卒業論文（昭和56年度）によった。また保育担当の菅原尚美さんにも御協力頂いた。記して感謝する。